

シニア女子バレーボールチーム帯同記 ～世界バレー・東京大会に帯同して～

小原 和宏*

はじめに

バレーボールだけではなくスポーツの大会において、ドクターの帯同が多くなってきています。選手やスタッフの健康管理、応急処置のみならず、練習のお手伝いなど様々な仕事があります。今回私は初めて、シニア女子チームの帯同を経験しましたので、帯同ドクターの一般的な仕事内容の紹介と、今回帯同して得た事や反省点などをご報告させていただきます。

バレーボール大会における帯同ドクターの仕事

「帯同ドクターの仕事は大会中における選手の健康管理」といえば当たり前のことですが、試合期間中だけで選手の全てを理解することは非常に困難です。ドクターの殆どが試合直前にチームに合流するからです。ですから、まず最初に試合前の合宿から帯同しているトレーナーの方々から選手の情報を得ることになります。怪我の内容、体調、そして内服している薬などです。選手の内服薬状況の理解は大事であり、大会で実施することのあるドーピング検査で内服薬（外用剤・注射剤も含みます）などを報告する必要があります。また、バレーボール協会医事スタッフにおいて、あらかじめ用意されている医療品の入ったカバンがあります。この中には、内服薬、応急処置の道具（怪我をした場合の縫合セットなど）が入っており、大会期間中に選手・スタッフが体調不良になったときに使用します。長期にわたる大会では、全ての日程を一人のドクターで帯同することは出来ないため、数名で分け合うことがあります（前半・後半など）。その際は、次に帯同するドクターに選手の状態を伝えることが重要です。他には練習に参加することも非常に重要で、選手の調子（精神的・肉体的）、練習メニューを確認することが出来ます。また、食事と同じ場でとりますが、選手の食事摂取状況を“ちらちら”と見ておく必要もあります。

今回は日本開催ですから問題ありませんが、外国開催の大会では、水分摂取で腹部症状（嘔吐・下痢）を起こすことがあるため要注意です。氷にも注意する必要がある、歯磨きの水もミネラルウォーターを使用するように勧めます。食事においては現地の水で洗って火を通してない物（サラダなど）も控えた方がよいとされています。ドクター

の理解だけではなくスタッフ、選手に理解してもらうことが大事です（自由時間に自分の判断で摂取しないようにするためです）。

世界バレー帯同

今回私は2006年10月29日から11月6日までの間、世界バレー東京大会に帯同させていただく機会を得ました。団長、監督、マネージャー、コーチ、トレーナー、ドクター、選手が参加することになりました（総勢24名）。帯同当日は合宿から帯同していたトレーナーから選手の情報（体調、内服薬状況など）を得ることから始まりました。大会の前半とはいえ試合前に大量の練習を積み重ねてきたので要注意です。その状況を理解した上で、トレーナーの方々とともに選手の治療に挑むこととなります。ケガの中には、外傷と障害があります。外傷は突発的に起こる骨折や捻挫を言い、障害は継続的な運動において起こるものを言います。毎日体を酷使している選手においては障害が治癒せず続いている事が多く、トレーナーの方々が日々努力し治療に当たることになります。その治療をしっかりと理解し、新たな障害・外傷がないかを確認します。もしあれば診察することになります。また、風邪や腹痛など内科的な診察も大変重要です。今回の大会では、下腿三頭筋の張りの増強、吐き気、額部・頬部痛、肌荒れ、アキレス腱痛、腰痛、全身倦怠感、突き指などがありました。それぞれ、内服薬・応急処置などで対応し何とか世界バレーの前半戦を乗り切ることが出来ました。試合の方は予選の初戦を落としたものの、その後は連勝し、4勝1敗で予選2位となりました。

世界バレー帯同を終えて

初めてのシニア女子帯同を大きな国際大会で経験することが出来ましたが、2ヶ月位前から毎日緊張していました。世界の舞台で戦うスタッフ、選手の足を引っ張らないように・・・。選手の名前は知っていたのですが、ニックネームで呼び合う姿をテレビで見たため、選手の名前とニックネームを間違えないように雑誌の選手の欄を何度も覚えてきたり、今まで故障で苦しんでいた選手の特集があればしっかりと目を通していました。また、ドーピング検査の方で細心の注意を払うように一から勉強し直したりもしました。実際帯同しますと、忙しさも手伝ってか、あっという間に帯同期間が終了しました。帯同期間が終了した後も毎日テレビで試合を観戦しましたが、帯同前はただ応援するだけ

*旭川リハビリテーション病院 整形外科

でしたが、帯同後は選手の動きを見て「ここに痛みがあったはずだけど大丈夫かな・・・。」と考えて見るように変化しました。

またスタッフの皆様が私よりも先に選手の変化に気づくこともあり、自分自身の力不足を感じる場面があり大変勉強になりました。

余 談

大会期間中はスタッフの方々と移動の手段でウォーキングをしました。日によっては1時間以上歩くこともありました。私の仕事では、手術の時に長時間立つことはあってもほとんど歩きませんので、健康のためにも頑張っついで行こうと努力しましたが、数日で左膝の腸脛靭帯炎を誘発してしまい、ウォーキングに参加できなくなってしまいました。かなりの痛みで練習のお手伝いもままならなくな

り、女子帯同ドクタースタッフの山口先生に注射をしていただきました。私自身が患者側の立場になり、山口先生の注射が著効し、先生が神様のように感じました。監督には帰省後もウォーキングするよう勧められ、今では約9kgの減量をはたし、生まれ変わった次第です。

最 後 に

地方（北海道）の医師が、シニア女子バレーチームの国際大会に帯同する機会を与えてくださった皆様方に感謝するとともに、初めての帯同にもかかわらず暖かく受け入れてくださった、監督をはじめスタッフの皆様感謝申し上げます。この経験を生かし、世界に羽ばたく選手、地元で頑張っている選手のサポートに今後も励んでいこうと思っております。